

『造作辨圖解 上下』と『加州金澤御城来因略記』

—金沢城石川門・河北門整備の根拠史料に関する検証—

正見 泰

1 金沢城整備と復元設計

現在、金沢城では、平成18年より石川門太鼓塀の保存修理工事が、また平成19年からは河北門の復元工事が始まっている。それらの整備事業にあたって、当研究所が調査した多数の史料や発掘の成果が設計に利用された。

石川門太鼓塀の控えの形状や取付け方は、明治以後に変更されており、今回の整備で元々の形状に復元することが検討されたが、元々の控えの状況を撮影した写真などは見つかっていない。また、明治15年以降、河北門はその遺構が破壊にさらされており、今般の発掘調査によっても、二ノ門の細部の寸法は不明な箇所が多い。このような状況の中で、平成18年9月、金沢市内で代々建設業に携わってきた真柄家から新たに発見された50分の1の河北門二ノ門とする立面図は、細かな寸法を検証するのに大いに役に立つものであった⁽¹⁾。そして、この図と並んで『造作辨圖解 上下』（以下、『造作弁図解』と表記する。金沢市立玉川図書館近世史料館「清水文庫」所収）と、『加州金澤御城来因略記』（以下、『来因略記』とする。石川県立図書館蔵）という2つの江戸時代の図面集が、石川門附属太鼓塀の控えや河北門の復元設計にあたり参考とされた。

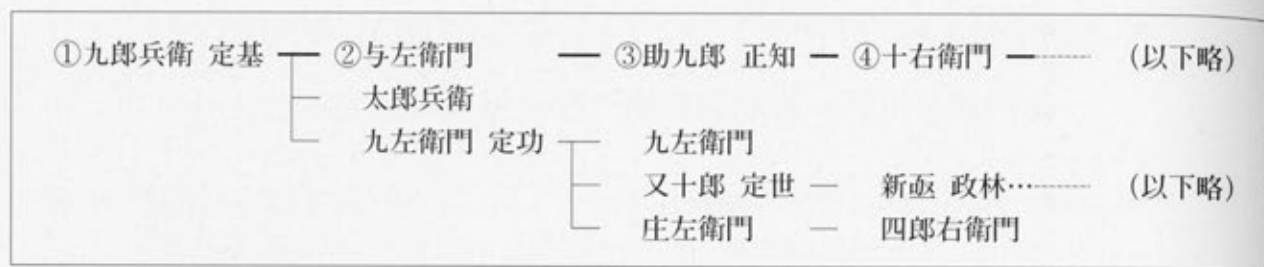
この両史料のうち、『来因略記』は、先の菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓等の復元設計にも利用されており⁽²⁾、以前よりよく知られている史料であり、金沢城の姿を論ずる場合に不可欠な重要史料として利用されているものである。しかし、その成立については、編纂者の渡部知重が加賀藩御大工であったことは、木越隆三氏が明らかにした⁽³⁾ばかりであり、収録内容や構成の検証はこれまで不十分であったと考える。一方、『造作弁図解』は、若山滋・麓和善の両氏によって、構法雛形の部門別造作雛形（付属）に分類され、同書の構成等の紹介や成立についての推測がされている⁽⁴⁾。しかし、『来因略記』に比較すると周知の程度は低く、これまで取り上げられることが少なかった史料である。そのため、『造作弁図解』は石川門附属太鼓塀や河北門二ノ門を思わせる断面図や立面図を多数収録しているが、今般の復元設計への利用の可否について検証が求められ、当研究所の課題となっていた。

そこで本稿では、『造作弁図解』の原所蔵者やその構成の考察、及び『来因略記』の収録図面・構成を検討しつつ、両史料の比較を通じて、現在行われている金沢城石川門・河北門整備の設計における根拠史料としての両史料の妥当性を検証したい。

2 「清水文庫」と『造作弁図解』

2-1 「清水文庫」を残した清水家

金沢城史料叢書3『金沢東照宮（尾崎神社）の研究』で既に麓和善氏が紹介している⁽⁵⁾ように、金沢東照宮造営を担当した藩御大工の一人に清水助九郎正知が居た。この助九郎の家系を本家とする加賀藩お抱え大工の清水一族は、尾張から前田利家に従って越前に移住して以降お抱え大工となったされる清水九郎兵衛定基を初代としている⁽⁶⁾（図-1）。そして、次の世代では3家に分かれ、そのうち嫡子である与左衛門が前述の助九郎正知の実父にあたるのである。ところで、九郎兵衛定基の三男である九左衛門定功は、3兄弟の中で最も高禄を最終的に受けていた⁽⁷⁾。しかし、このことは九左衛門定功が長生きであったことや、九左衛門定功が隠居した元藩主の利常に従って小松に移っており、同じ小松の御大工である山上吉廣が当時の本藩御大工にさえ居なかった知行100石取りに達したとされていること、にも留意せねばならない。すなわち、九左衛門定功が高禄であったことは、長生きし



図一 加賀藩御大工清水家の系図

河田克博氏（名古屋工業大学教授）作成の「清水家系譜」より

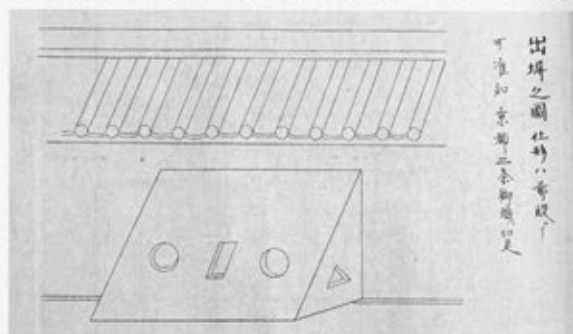
たことや小松勤務であったことなど、その後の経歴の結果である可能性が高く、高禄だけを理由として清水本家を継いでいたと考えることはできないのである⁽⁸⁾。さらに、その九左衛門定功家は次の世代で再度3家に分家しており、次男の又十郎定世（助九郎正知の従兄弟）が「清水文庫」を残した清水家の始祖となった。この時の家禄の分割状況から見て、又十郎家は九左衛門定功家の分家であったことは明らかであり⁽⁹⁾、すなわち少なくとも又十郎家は、この清水一族の中では傍系であったことに疑いがないのである。

しかし、傍系であったとは言え又十郎家は、その後、藩内の大工の最高職となる御大工頭を3人輩出していることから見て、清水本家（助九郎正知の家系）と並んで清水又十郎家も、加賀藩御大工の名家の1つと考えて良いであろう⁽¹⁰⁾。そして、「清水文庫」は、その又十郎家が江戸時代から昭和初期にかけて作製・所蔵した図面・書籍類を、太平洋戦争中に子孫の清水秀夫氏が金沢市に寄贈したものである。同文庫に納められている書籍類には明治以降のものも多数含まれてはいるが、江戸時代の大工関連の史料がまとまって残っている。しかも、それらの史料は、前述したように加賀藩のトップクラスのお抱え大工が直に残した第一級のものが揃っていることから、『造作弁図解』も近世大工研究において非常に重要度の高い史料であると考えられるのである。

2-2 『造作弁図解』の構成と成立時期

さて、『造作弁図解』の構成について検討するとき、同書の表題に「上下」とあることにまず気が付く。つまり当初は2巻構成であったようだが、現在は合巻されて1巻になっている。合巻後の現状の『造作弁図解』の内容構成は、①最初の約1/3は、「太鼓塀」（ただし図中では二重塀と表記されている）の詳細図等が多くを占め、出塀、切塀、石打棚の図と続き塀に関連する図面が並んでいる。②次の中程1/4強は、固有名称は付けられていないが愛本橋を思わせる「埴橋^{はねばし}」の詳細図（図一6）が多くを占め、太鼓橋、車橋といった橋関連の図面がその前後にあり、橋金具の図も多数収録されている。そして、ここまでが合巻前の第一巻目である。③この後の2/5強は二巻目であり、平門や唐門の図に続き、櫓形門に関連する図が多数詳細に収録されている。このように、二巻目は門に関する図だけで構成されていたようである。

ところで、①塀の部の冒頭には金沢城の太鼓塀に関するとと思われる図が並んでいるのであるが、「出塀之図」（図一2）として、「京都二条御城如是」した図も収録されており、金沢城以外の城も参考にして作製されていたことが注目される。また、金沢城で現在「太鼓塀」と呼んでいる土塀は一般的には二重塀とされている種類の塀であり、反対に金沢城で現在「二重塀」と呼んでいる土塀は一般的には太鼓塀なのである。しかし、先に示したように『造作弁



図一2 『造作弁図解』「出塀之図」

金沢城の塀に、このような仕掛が存在したことは確認されていない。この図に限って、他城の装置を参考としたのだろうか。



図-3 『造作弁図解』
「真之二重堀下地内之方」ほか

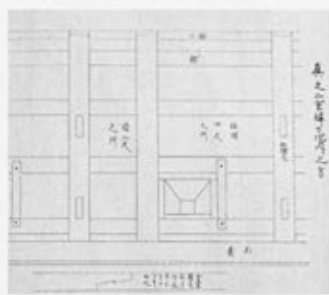


図-4 『来因略記』
「太鼓堀仕組之図」

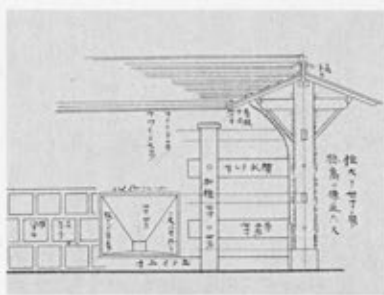


図-5 実際の石川門
附属太鼓堀

図解』の二重堀（図-3）と記されている図は、現在金沢城で呼ぶところの「太鼓堀」（図-4、5）なのである。このことから、『造作弁図解』の呼称が古い時代のものを伝えていると考えることができ、金沢城でも年代を遡れば「二重堀」と「太鼓堀」が現在とは反対、すなわち一般的な土堀の呼び方と一致していた可能性を示していることになる。

とすれば、『造作弁図解』は金沢城固有の堀種名称の変遷を研究する上でも、非常に重要な意味を持つ史料であると言える。そして、文化の大火（1808年）後に鶴ノ丸の土堀等を再建した指図と思われる『金沢城橋爪御門・鶴之丸堀鉄砲狭間之図』⁽¹²⁾⁽¹³⁾では、既に一般的な太鼓堀を「二重堀」としており、宝暦の大火（1759年）以前の姿を基本に描かれている『来因略記』の立面図集の部分や『金沢城建物起絵図』⁽¹³⁾（以下、『起絵図』）では、同じ位置の土堀を「太鼓堀」としている⁽¹⁴⁾。これらのことから、『造作弁図解』（またはその原本）は、文化の大火以前に成立していたことが推測される⁽¹⁵⁾。

なお、旧上下の各巻末の言葉によれば、一卷目には、「小図であるので規矩が正確ではないものがある」とし、二巻目では、「委細は、筆授し尽くすのは難しく、口授されるべきもの也」とされている。このことから判断すると、『造作弁図解』は概要を伝授する雛形図集であると考えてよく、また収録されている図を直接計測して利用することは想定されておらず、あくまでも大まかな形状や構造の概念を示しているに過ぎない、と考えた方がよさそうである。

そこで試みに、『造作弁図解』の「埴橋」の図（図-6）を、金沢市立玉川図書館蔵の『愛本橋建築之図』（図-7）等の既に確認されている愛本橋の指図⁽¹⁶⁾と比較して見ると、これらの指図と「埴橋」の図は非常に酷似した図であるが、全く同じ図ではないことがわか

『造作弁図解』の構成

上巻

①堀の部

- (a) 「太鼓堀」関連の図
- (b) 出狭間関連の図
- (c) 出堀之図
- (d) 切堀口之図
- (e) 櫓形高堀 石打棚
重狭間之図

②橋の部

- (a) 「太鼓橋」関連の図
- (b) 橋金具之図
- (c) 「埴橋」関連の図
- (d) 車橋之図

下巻

③門の部

- (a) 平門関連の図
- (b) 唐門の図
- (c) 一之門関連の図
- (d) 二之門関連の図

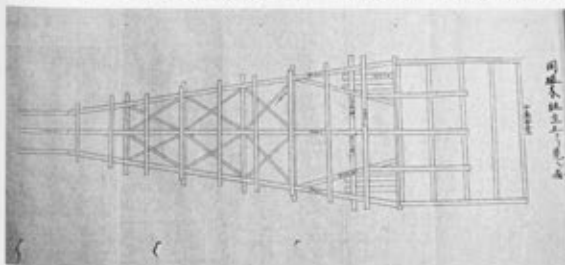


図-6 『造作弁図解』「同埴木組立上ヨリ見ル図」

「ツカフミ」の段数や、「元ハ子木」の入り方が異なっている様子が分かる。

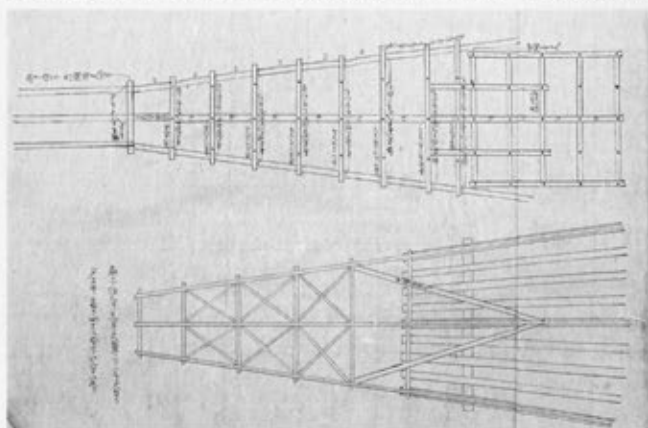


図-7 『愛本橋建築之図』より

る。田中徳英氏によって、愛本橋はたびたび架け替えが行われていることが明らかにされている⁽¹⁶⁾ので、それらの指図とは異なる時期の実際の愛本橋を写した図である可能性も否定できないが、少なくとも『造作弁図解』の「埴橋」の図は、一般的な「埴橋」の雛形として十分な内容を持った図面であると考えてよいであろう。なお、②橋の部以外の城郭建築⁽¹⁷⁾を対象としている①塀の部及び③門の部の評価については、『来因略記』収録図面との比較を通して後ほど詳しく検証する。

以上のように、『造作弁図解』の原所蔵者像と、①塀の部②橋の部③門の部の3部から成る構成を明らかにし、史料的な価値が高いことを確認した。また、土塀の名称の記述から文化の大火以前に成立していたことを推測した。しかし、又十郎の家系の誰が原作者あるいは筆写者であるか、またその成立過程については本稿で明らかにできなかった。

3 『来因略記』の構成と成立

3-1 『来因略記』の構成

一方、『来因略記』は、前述のように清水家と同じく代々藩御大工を勤め、御大工頭を2人輩出している大工の名家である渡部家の祐六郎知重⁽¹⁸⁾によって、天保15年(1844)に編纂されたものであり、金沢城の城郭建築の研究上最も良く利用されている金沢城の立面図集である。渡部家については、北野勝次氏の研究⁽¹⁹⁾に詳しいが、ここでも簡単に触れておくこととする。渡部家は、寛永7年(1630)に御扶持方大工として前田家に召し抱えられた伊右衛門から数えて知重は8代目であり、その家系は図-8のようになる。なお、付け加えると、明治11年に金沢城内にあった東照宮を、尾崎神社の現社地に移転したときの設計図である『御宮移転図巻』⁽²⁰⁾を作製した渡部知先(初之進)は、元加賀藩御大工であり知重の嫡子であった。奇しくも、両史料と関係深い清水一族と渡部家の両者は、金沢東照宮の創設・移転において重要な役割を果たしていたのである。

ところで、その立面図集が本書の主体を成すことと、『来因略記』を全体書名としていることに筆者は以前より違和感を感じていた。すなわち『来因略記』とは、そのまま現代語に解釈すれば、「加賀国の金沢城の来因(来歴)を略記(概略を記)する」と言う意味であるはずである。しかし、この立面図集は、金沢城の宝暦大火前の姿を基本として、それ以降の修築の情報を加えられてはいるが、金沢城の歴史全体から見れば宝暦大火直前からの一時期の姿を記録しているに過ぎない反面、立面図の内容は省「略」されることなく極めて網羅的かつ具体的なのである。

そこで、『来因略記』の構成について詳細に再検討した結果、本来の『来因略記』とは、本書の巻首冒頭の文字だけで構成されている部分を限定的に指しているのではないかと判断される。その理由は、「加州御城来因略記」の表題を含めて該当部分だけが特に朱線で囲まれており、本書のほかの部分とは意識的に区分されているからである(図-9)。したがって、その後に続く絵図・指図の部分は、参考資料的に収録したものか、全く別にあった史料がたまたまこの順で収録されているに過ぎず、「加州金澤御城来因略記」に該当する部分ではなかったと考えられる。実際に、朱線枠の直後にある全域の城絵図には「金府御城中惣御絵図」という題名が付されており⁽²¹⁾、その後に立面図集の部分がが続いている。さらに『来因略記』には、これまでその立面図集の部分と一連のものと認識されてきたかもしれないが、細かく見ていくと、立面図集の後に22面を数える木摧(木割)解説付きの指図や雛形を思わせる図面が巻末まで続いているのである。

①伊右衛門 — ②伊兵衛 — ③惣兵衛 — ④源兵衛 — ⑤伊左衛門 政美 — ⑥武左衛門 政盛
— ⑦伊右衛門 成美(伊兵衛) — ⑧祐六郎 知重 — ⑨知先(初之進)

図-8 加賀藩御大工渡部(渡邊)家の系図

() はよく使われる別名

『御大工知行帳』、『寛政年中より御大工頭御大工被召出候名前御知行御切米高并御扶持方大工名前等覚書帳』(ともに清水文庫⁽²²⁾所収)により作成した。



図-9 『来因略記』の
巻首部分

当該部分は続紙5枚、
1.5m近くもあるため、
中間部を省略したが、写
真のように枠（朱線）で
囲われている。

3-2 構成から読み解く『来因略記』の成立

さて、本来の『来因略記』と判断した巻首部分は、この部分の最終段に記されているように、享保19年（1734）4月に有沢武貞が著した「加陽金府地理」とほぼ同じ文と考えられる⁽²³⁾。そして、それに続いて『来因略記』の主要部分をなす城郭建築の立面図集の部分は、本誌第4号の拙稿⁽²⁴⁾の注20でもすでに指摘していたが、『起絵図』などと同系統の図面集であり、『来因略記』成立の以前から存在していた同様の原図からの写しであると考えられる。ところが巻末の詳細図の部分は、②立面図集の部分と同系統の図面集と見ている『御城中総櫓並御門絵図』などには含まれておらず、同系統の図面集とは別の図面の部分と見ることができるのである。したがって、『来因略記』は、巻首にある①本来の『来因略記』、②『起絵図』などと同系統の立面図集のほか、③巻末の22面の図面を加えた3つの部分から構成されていると考えられるのである。

さらに『来因略記』中の③巻末22面の図面の部分を詳細に見ると、土橋門の図から後に、「二之門金具打立タル図」～「渡櫓屋根裏ヨリ見上タル図」の4面の図面と、塀の出窓の詳細と塀の一般断面に関する5面の図面は『造作弁図解』に酷似した図が収録されているのである。また、最巻末の二重塀の立断面図（図-10）には、『造作弁図解』の中にはなかったが、『御本丸二重塀之図』⁽²²⁾（図-11）によく似た図面が存在している。そのほかの12面のうち、二重櫓の断面図・平面図と二重塀の立断面図の3面を除く、9面には具体的な建物名称が書かれており、③巻末22面のうち一般名称が付けられた13面とは異質なのである。それらの具体的な名称が書かれた9面の図面中で最初に位置している三階櫓と辰巳櫓は、前掲の拙稿⁽²⁴⁾の検証では宝暦の大火後に再建計画があったが、中止されたと考えられる櫓である。そこで、同稿の注27で、『来因略記』のその後に続く丑寅櫓、ニラミ櫓の2櫓にも同時期に再建計画があったのではないかと指摘したところである。また、辰巳櫓平面図のうち、先に掲載されている「辰巳御櫓指図」（図-12）については、ほぼ同じ図を『辰巳御櫓絵図』（「清水文庫」所収）に見ることができる⁽²⁵⁾（図-13）。この『辰巳御櫓絵図』は、前掲の拙稿⁽²⁴⁾の中で、宝暦の大火後の再建に際して清水家が収集した図面と考えたもので、『来因略記』の6面も再建計画に関係して収集された可能性を示唆していると考ええる。また、そのほかの16面総てではないものの、6割に当たる10面については酷似した図面が別に存在していることを今回確認できた。なお、この③巻末22面については、次章の『造作弁図解』収録図面との比較を通じて、より詳しく検証を行うこととしたい。

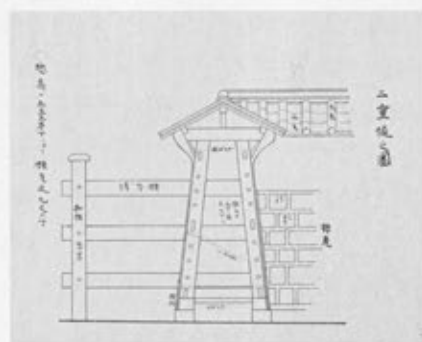


図-10 『来因略記』「二重塀之図」

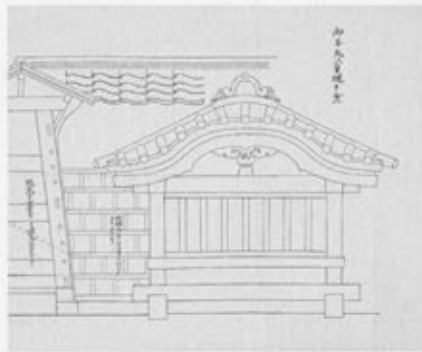
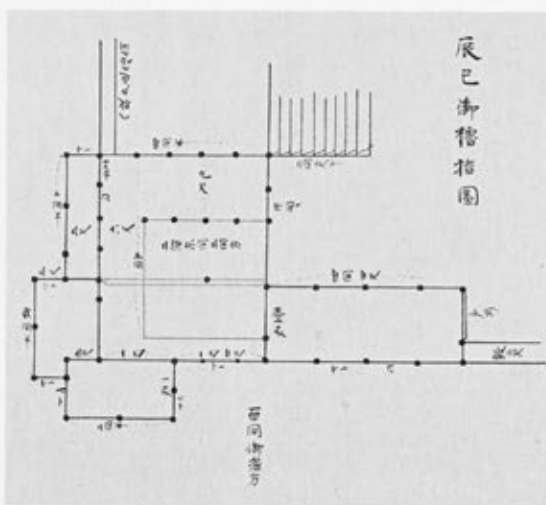


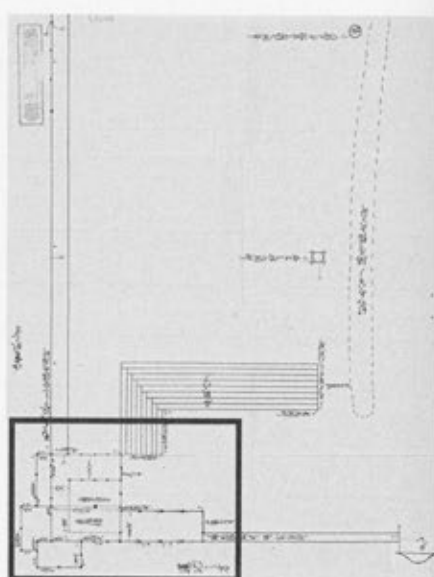
図-11 『御本丸二重塀之図』

以上のように、木越氏の前掲論稿⁽³⁾で既に指摘されているが、

図12は、図13の太線囲み（筆者加筆）部分を、切り出した図面であることが分かる。（縮小率不同）



図一12 『来因略記』「辰巳御櫓指図」

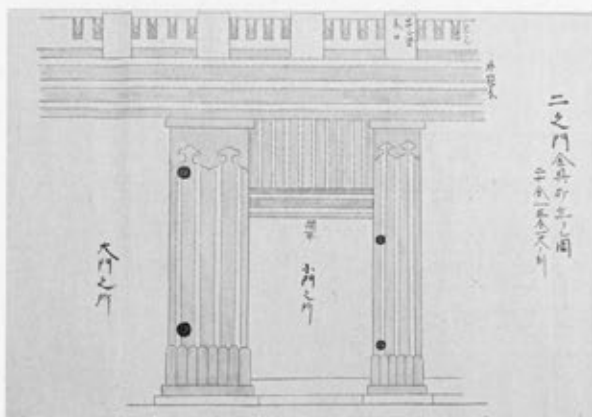


図一13 『辰巳御櫓絵図』③

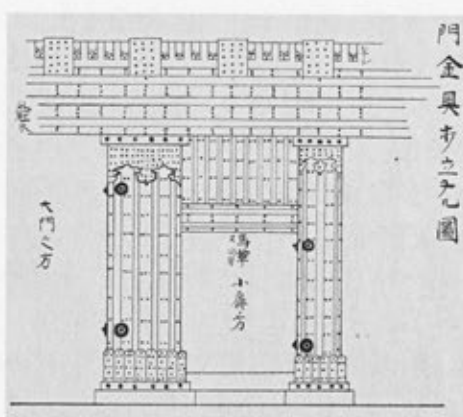
『来因略記』は編纂者である知重自身が朱線で囲んだ①巻首部分の最後段で記している⁽²⁶⁾ように、知重独自に著作・製図したものではなく、3つのどの部分の文・図にも別に原本が存在し、天保15年頃までに渡部家及び知重が収集した文書・図面の集合体と考えてよいことが確認された。そして、『来因略記』の編纂には、中止された櫓再建計画が契機として関係していたのではなかったか、と筆者は推測した。

4 『来因略記』巻末22面と『造作弁図解』の比較

さて、『来因略記』中の③巻末22面の図面の部分には、前述したように『造作弁図解』の①扉及び③門の部と関係ありそうな図が収録されているので、ここで詳細に検討する。すなわち、「二之門金具打立タル図」～「渡櫓屋根裏ヨリ見上タル図」の桁形門二ノ門に関する4面の図面は、金具の表現方法こそ異なるものの、『造作弁図解』の③門の部に収録されている同名の図面とほぼ同じ図であり（図一14、1～2）、続く『来因略記』の扉の出窓と一般断面に関する5面の図面も、数値等が完全には一致していないものの『造作弁図解』の①扉の部に酷似した図が収録されているのである。しかし、そのほかの13面は、『造作弁図解』には似た図は収録されておらず、二重櫓の断面図・平面図、二重扉と太鼓扉の一般断面立面である一般名称の4面と、具体的な櫓名が書かれた9面の図面である。そして、具体的な名称が書かれた9面は、さらに始めの平面図が描かれている4櫓6面と、立断面図と木摧も収録される土橋門（明記されていないが二ノ門だけが描かれている）の3面とは明らかに質的な差があり区別される。前述のとおり、平面図が描かれた4櫓については、中止された再建計画のあ



図一14.1 『造作弁図解』の図



図一14.2 『来因略記』の図

左の両図面のタイトルはともに「二之門金具打立タル図」と同じであり、内容もほぼ同じであるが、金具部分の表現方法が全く異なっている。

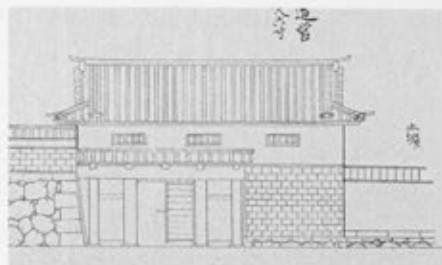
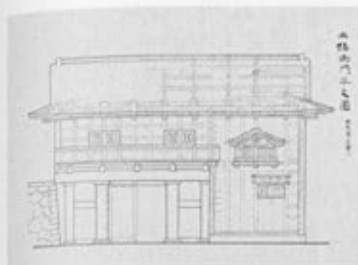


図-15.1 巻末の立断面
(宝暦の大火前)

図-15.2 立面図集(宝暦の大火前)

図-15.3 立面図集(宝暦の大火後)

上図は、『来因略記』に収録されている土橋門二ノ門の3種類の立面等である。

図-15.1と15.2の2図はともに宝暦の大火前はとされているが、姿は同じではない。

った櫓ではないかと推測したが、土橋門については、宝暦の大火後の文化2年(1805)に再建されており、文化の大火では危うく焼失を免れていることから、中止された櫓再建計画には無関係と考えられる。一方、重大な疑問点として、③巻末22面中の土橋門の立断面図は、宝暦の大火前の図であることを示す「先年の図」と記されているにもかかわらず、②立面図集の部分に収録されている土橋門の宝暦の大火前の立面とも、大火後の立面とも合致しないことが挙げられる(図-15.1~3)。

ここで、『来因略記』の③巻末22面の構成を改めて整理すると、平面図が描かれた4櫓6面(ニラミ櫓のみ木摧付き)の後に、一般名称の「二重櫓」の断面図・木摧を挟んで、具体的な名称を明示する最後の土橋門の図3面が来ており、その後、先に述べた「二之門金具打立タル図」などの図面が続き、最後には太鼓塀・二重塀の立断面図という構成になっている。すなわち、(a)櫓関連、(b)城門関連、(c)塀関連の順に図面が並び、さらに具体的な名称の付いた図から一般名称の図の順になっていることが判る。そこで、土橋門の3面については、具体的な名称の付いた図ではあるが、中止された櫓再建計画には直接関係した図面ではなく、特に木摧が付されていることと、②立面図集部分の立面とは異なる立断面図であることから、実施された指図に近い図面である可能性は否定できないが、土橋門二ノ門と同形式の櫓門に関する一種の雛形図であったことも考えられる⁽²⁷⁾。この点についても、稿を改めて詳しく検証を行いたい。

ところで『来因略記』の③巻末22面のうち、残る二重櫓の断面図・平面図、二重塀と太鼓塀の一般断面図の4面については、『造作弁図解』に似た図はなかったものも、前述したように二重塀の断面図には、『御本丸二重塀之図』のような似た図面が残っている。したがって、そのほかの3面についてもおそらく、『造作弁図解』と同じような雛形図面として流布していた図面が、原図になっているのではないかと類推される。

以上のように、『来因略記』の収録図面を『造作弁図解』の収録図面と比較することによって、『来因略記』の③巻末22面のそれぞれの図面の収録意図を推測し、再建時の資料や雛形としての可能性について指摘することができた。また、『造作弁図解』の①塀の部及び③門の部の図面については、『来因略記』に非常によく似た図、すなわち描写内容だけでなく呼称まで一致する図が収録されていることから、先に橋の部の図面と愛本橋の実施図面との比較により確認されたことと併せて、『造作弁図解』と『来因略記』の③巻末22面(4櫓6平面を除く)は、加賀藩内の大工に流布していた同様の雛形図を参考に作製

『来因略記』の構成

①本来の「来因略記」の部分

「金府御城中惣御絵図」

②立面図集の部分

配置詳細(曲輪図)と城郭建築物の立面

(a) 御本丸之部

(東之丸之部・御本丸附櫓之部・東之丸附櫓之部)

(b) 二之御丸之部

(c) 鶴之丸部

(d) 薪之丸部・玉泉院様丸之部

(e) 御宮之部 [以下2巻目]

(f) 三之御丸部

(g) 新丸之部

(h) 百間御堀之部

(i) 御花畑之部

(j) 堂形御馬場之部

(k) 金谷御殿廻之部

③巻末22面の部分

(a) 櫓関連の図

(b) 城門関連の図

(c) 塀関連の図

された図であった可能性が高い。

5 設計根拠としての両史料

本稿の検証によって、『造作弁図解』に収録されている図面は、実際に藩内で建設された建造物の指図等と非常に似通っていることは判ったが、実際には細部が異なることや具体的名称が付されていないこと等から判断して、『造作弁図解』は特定の建造物の実際の指図等ではなく、加賀藩の建造物に特化した雛形図集であったと考えられる。また、別の御大工家で編纂された『来因略記』の巻末にも同様の図が収録されていることから判断すると、このような雛形図面が、藩内の大工の間に広く流布していた可能性が高かったことが窺える。

しかし反面、『造作弁図解』の図は雛形を示しているだけであるから、『造作弁図解』の図面どおりに建設された建造物は現実には存在していない可能性が高いことも、復元設計等に利用する際には考慮しなければならない。一方、『来因略記』については、②立面図集の部分は、宝暦の大火前後の金沢城の城郭建築について具体的な情報を与えてくれるものとして利用されてきたが、今回、構成の点や具体的な土橋門の例から問題点の指摘を行った。そして、これに続く③巻末の22面の図面は、中止された櫓再建計画に関係する可能性のある先頭の4櫓6面を除くと、『造作弁図解』収録図等に酷似した図が存在していることから、『造作弁図解』等と同じく、なんらかの雛形図を原図として成立したと考えられる。

以上により、『造作弁図解』も『来因略記』も根拠史料として復元整備に使用する際には、どちらの史料についても雛形である図面が含まれている点、また『来因略記』の立面図集に関しては条件付きで参考のできる点⁽²⁸⁾などに留意して、遺構と照合しつつ設計寸法・形状を調整すれば、いずれも非常に利用価値の高い史料であると言える。

[註]

- (1)『金沢城研究 第5号』(金沢城研究調査室 2007)掲載の「河北門に関する絵図・文献資料」p. 80・81(木越隆三氏担当部分) 参照
- (2)『金沢城公園 菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓等 復元工事報告書』石川県土木部営繕課 2003
- (3)木越隆三「金沢城全域図の分類と編年—金沢城絵図調査報告Ⅰ—」『金沢城研究 第2号』金沢城研究調査室 2004
- (4)日本建築古典叢書 第8巻『近世建築書—構法雛形』大龍堂書店 1993
- (5)麓 和善(名古屋工業大学教授)分担の、第2章「金沢東照宮の建築」/金沢城研究調査室 2006
- (6)『清水多四郎 先祖由緒并一類附帳』1870(金沢市玉川図書館蔵)
- (7)『御大工知行帳』によれば、最終的な切米の高は、嫡子与左衛門と次男太郎兵衛は50俵だが、三男九左衛門は60俵に達したとされている。ただし、与左衛門は22才で若死にしている。
また、九左衛門は明暦の江戸城天守台普請にも参加したとされ、それらの功績が加味されたと思われる。
- (8)「清水家由緒」(『清水文庫目録』金沢市立図書館 1952)で「九左衛門が二代を継ぎ」とされ、また 定世まで、「定」の字を継いでいるので又十郎家が清水本家のように見えるが、『御大工知行帳』では、定基・定功・定世などの実名は確認できず、本当にそのように名乗っていたのかは不確かである。
さらに、『御大工知行帳』には、助九郎の系統にだけ2代、3代…と付記されているので、嫡子の与左衛門が本家2代目を継いだと考えて良さそうである。
- (9)仮に九左衛門定功家が清水本家を継いでいたとしても、九左衛門定功(親)の60俵を嫡子九左衛門(子)が40俵、次男又十郎が10俵、三男庄左衛門が10俵と分割相続しているの、又十郎家は少なくとも九左衛門定功家の分家であったことは明白である。

- (10) 清水本家（助九郎正知の家系）も、又十郎家も御大工頭を3人輩出している。
- (11) 図題に「埴木」の文字を含む図-6などの図面で、図中の部材名称として「ハ子木」等と表記していることから、この場合「埴」の字は「はね」と読まれたと判断した。
- (12) 『金沢城橋爪御門・鶴之丸塀鉄砲狭間之図』は、文化の大火後の二ノ丸等の再建事業を総合的に担当する御造営奉行を勤めた高島厚定の孫である「定辟」^{きだのり}が、明治維新後に旧藩主である前田家に献上した史料である。そのため、本図は文化大火後の再建時の指図である可能性が非常に高いと考えられる。金沢城史料叢書1『御造営方日並記 上巻』（金沢城研究調査室 2004）の石野友康氏の解説を参照。
- (13) 加越能文庫（金沢市立玉川図書館蔵）所収
- (14) 当初、「同系統の図面集」の書き違いの可能性も考えられるが、宝暦の大火から文化大火後の再建までの間に、現在金沢城で言うところの「太鼓塀」が、同じく「二重塀」へと物的な塀種そのものが変更された、と筆者は解釈していた（本稿註2の工事報告書p. 22参照）。
- しかし、本発見によって、物的には同一構造の土塀の呼称が、文化大火に至るまでの間に入れ替わったことによる相違である可能性もでてきた。
- (15) 前出の『近世建築書一構法雛形』では、成立時期を天明8年以降としており、その根拠は、『造作弁図解』中の「一之門」及び「同（二之門）行間之図」が、天明8年に再建された現・石川門の表門（一ノ門）及び櫓門（二ノ門）であるとしたことによった。確かに同書の二ノ門は、正面の窓及び「出し」の配列は現・石川門と同じであるが、プロポーションは各部で現・石川門と異なっている。
- さらに、同図の注書きでは梁間方向に土居からの入口があるとしているが、現・石川門の入口は桁行方向である。また、石川門二ノ門であれば、正面に向かって右側面に唐破風の出しが存在するはずであるが、同図にはその描写はない。加えて、同書の一ノ門の姿も現・石川門とは異なっており、『来因略記』の記載を参考にすれば、宝暦大火前の河北門や文化大火前の橋爪門の一ノ門にむしろ酷似しているのである。
- 以上総合すれば、現時点では、同書の一之門・二之門ともに、天明8年再建の石川門一ノ門・二ノ門とすることは難しく、むしろ『造作弁図解』またはその祖本の成立時期は、もっと遡ることが考えられる。
- (16) 田中徳英「越中愛本橋の造営における加賀藩外作事方の役割」『日本建築学会計画系論文集 第495号』1997
- (17) 城郭建築は、元和の武家諸法度により新築・増築・改築が制限されている城内の建築物、つまり天守、櫓、城門、塀類に限って呼ぶ。城内にあっても御殿などは含まれず、『来因略記』の立面図集部分等には、御殿などの立面は掲載されていない。参考 三浦正幸『城の鑑賞基礎知識』（至文堂 1999）
- (18) 渡部祐六郎知重自身が、文久4年（1864）に御大工頭に昇進している。もう1人の御大工頭昇進者は、知重の養父伊右衛門成美である。ちなみに知重は、藩校明倫堂棟札に名を残している御大工中村八十右衛門（八兵衛知之）の子息で、長兄にあたる中村八郎輝景も御大工頭を勤めている。しかし、御大工頭中村半次・半左衛門の親子とは別系統らしい。
- (19) 北野勝次「加賀藩御大工頭渡部家」『加南地方史研究 第51号』加南地方史研究会 2004
- 北野氏は、加賀に移住した医者^{いしや}の渡邊善彌を初代としているが、本稿では加賀藩に大工としてはじめて仕えた伊右衛門を初代とした。また、2代伊兵衛まで苗字の表記は「渡邊」であったとされているが、本稿では一括して「渡部家」として扱った。
- (20) 尾崎神社蔵、金沢城史料叢書3『金沢東照宮（尾崎神社）の研究』金沢城研究調査室 2006に収録
- (21) 江戸前期の建物等色分図に、石川県立歴史博物館蔵の「金沢御城中惣絵図」、石川県立図書館蔵の「金沢御城中絵図惣絵図」が存在し、本稿註3の木越隆三氏の論考の中で、ともに作事所系城絵図B類に分類されている。また、近年金沢城研究調査室（当時）が調査し、平成19年に小松市の指定文化財となった、加賀藩御大工渡部家の古文書類の中にも、「加州金沢御城惣御絵図」の名称を持つ金沢城の城絵図（天保13年写、『来因略記』と関連した知重の蔵か）や「御城中惣御絵図」を入れていたとする袋が存在する。
- このことから、『来因略記』を含め、これらの作事所系及び御大工が所持した城絵図に似た名称が付けられていたことは偶然とは思われない。同一の史料から派生した一群の史料であることを窺わせる。

- (22) 金沢市立玉川図書館蔵
- (23) 原著と思われる享保19年4月付けで改正の有沢武貞著『「賀州金沢城下町割正極之大図（長家文書所収、穴水町歴史民俗資料館保管）」の序文』は、文章の順番に入れ変わりや、『来因略記』に記載されている文章で記載されていない部分があるもののほぼ同じ内容である。また、加越能文庫所収の『金城旧記』中の、同年同月付け武貞著とする「金沢事蹟考」も同様である。
- (24) 正見 泰「金沢城本丸櫓群の図面類について―辰巳櫓・三階櫓の図面類の検証―」『金沢城研究 第4号』金沢城研究調査室 2006
- (25) 本誌第5号の拙稿「金沢城本丸櫓群の図面類について II―辰巳櫓台修理の再現を通じて―」p. 51～52参照
- (26) この知重による編纂の辞が含まれていることで、『来因略記』が全体書名と見なされたと思われる。また同辞では、「一巻トナス」としているが、現在は2巻で構成されており後代の改変を疑わせる。
- (27) 例えば、土橋門形式の櫓門を指した図を、土橋門と省略して名称を付したなどのことが考えられる。なお、同形式の櫓門として、金沢城内には裏口門、数寄屋唐門、松坂門が存在する。
- 反対に、③巻末22面の方が宝暦の大火直前の実際の姿であったとすれば、②立面図集部分の図の方が誤っていることとなり、これまで無批判に近い形で使われてきた同系統の図面集の信憑性が問われることとなる。なお、文化2年の土橋門再建には、主附御大工として⑦渡部伊右衛門成美が参加している。
- (28) 本稿では論考できなかったが、『来因略記』②立面図集の主な注意点としては、石垣の高さが異なっていたり、地盤面の傾斜が考慮されていないなど、高さ関係に簡略化されている可能性が高いことなどが挙げられる。また、宝暦の大火後の修築の情報については、正確には描写されておらず、大きく異ならない範囲で「以前のとおりの」と表現しているようである。
- これまで、『来因略記』収録の立面は、無批判に近い形で利用されてきている。しかし、本稿でも述べたように、宝暦の大火前とする「土橋門」の立面を2種類収録していることがわかったことで、『来因略記』は渡部家が収集した史料をそのまま収録したものであって、編纂した知重自身が図面間の比較検証はしていなかったことの証左であると言える。
- また、②立面図集部分の曲輪図（配置図）は、別資料を挿入した可能性が高く、明らかに宝暦大火後を描いた図が含まれている。

[謝辞] 本稿をまとめるにあたり、麓和善氏と木越隆三氏より貴重なご教示を賜り、厚く御礼申し上げます。

前号の拙稿「金沢城本丸櫓群の図面類について II―辰巳櫓台修理の再現を通じて―」の訂正：

表-1中の「辰巳御櫓図」④の櫓タイプは、×Ⅱ型→○Ⅲ型